

令和7年度第1回大阪府障がい者自立支援協議会
発達障がい児者支援体制整備検討部会

日 時：令和7年6月24日（火） 14：30～16：30

場 所：大阪赤十字会館 302 号室

出席委員（五十音順）

井口 英子	地方独立行政法人 大阪府立病院機構大阪精神医療センター 児童・思春期診療部副部長
岡 あゆみ	大阪府発達障がい者支援センター アクトおおさか センター長
小田 浩伸	大阪大谷大学 教育専攻科長
片山 泰一	大阪大学大学院（大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学） 連合小児発達学研究科 教授
黒田 健治	阪南病院 院長（一般社団法人 大阪精神科病院協会）
西山 美知	一般社団法人 大阪自閉スペクトラム症協会
平山 哲	地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪母子医療センター 子どものこころの診療科 副部長
広野 ゆい	特定非営利活動法人 DDAC 代表
藤原 博子	大阪 LD 親の会「おたふく会」 副代表
松本 光次	大阪労働局 職業安定部 職業対策課 課長
松本 孝	独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構 大阪支部 大阪障害者職業センター 所長
吉田 祥司	社会福祉法人 大阪府障害者福祉事業団 事業推進室 こども発達支援課 課長
渡辺 颯修	大阪弁護士会

<開会>

○事務局

ただ今から、「令和7年度第1回大阪府障がい者自立支援協議会 発達障がい児者支援体制整備検討部会」を開催いたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

まず、会議の開会に先立ち、大阪府医療監からごあいさつ申し上げます。

○医療監

皆さま、こんにちは。「令和7年度第1回発達障がい児者支援体制整備検討部会」の開催にあたりまして、一言ごあいさつ申し上げたいと思います。

委員の皆さまにおかれましては、日頃より、大阪府の障がい福祉行政の推進に多大なるご理解とご協力をいただいておりますことを、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

そして、本日はご多忙のなか、また、梅雨の時期でお足元も不安定のなか、お越しいただきましてありがとうございます。

さて、現在、障がい福祉施策を進める道しるべとなっております「第5次大阪府障がい者計画」ですが、令和8年度末（来年度末）までの計画期間ということになっております。

このことから、大阪府では、今年度、「第6次大阪府障がい者計画策定検討部会」を立ち上げ、次期計画の策定に向け、年間を通して施策の方向性を議論することとしております。

発達障がい児者への支援につきましては、計画のなかで専門性の高い分野として最重要施策に位置付けられており、当部会においても、貴重なご意見を頂戴しながら、着実に取組を進めてまいりました。

発達障がいのある方々が、地域で安心して、また、自分らしく生活ができるよう、次期計画におきましても、これまでの取組をさらにブラッシュアップしていきたいと考えております。

そこで、本日は、発達障がい児者支援に係る主要な施策について振り返っていくとともに、地域の支援体制整備において重要な役割を担っていただいております市町村の取組状況を検証し、各テーマの課題を整理する機会としていきたいと思っております。

委員の皆さまにおかれましては、それぞれの分野、また、お立場の見知から、忌憚（きたん）のないご意見やご提案をちょうだいできればと思っております。

本日は限られた時間にはなりますが、ご意見を頂戴しながら、よりよいものに進めてまいりたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局

（委員の紹介、資料の確認、会議の公開についての説明）

○部会長

それでは、お手元の次第に沿って議事を進めてまいりたいと思います。

まず、議題1「令和7年度の主な検討内容について」ということで、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局

議題1「令和7年度の主な検討内容について」資料1に基づき説明。

○部会長

ありがとうございます。ただ今事務局から説明がありました、令和7年度の主な検討内容についての二つの検討項目案につきまして、何かご意見やご質問はございますでしょうか。入り口のところなので、そんなにご意見があるかなということになるかと思うのですが、よろしいですか。はい。

それでは、次へまいりたいと思います。議題2「第6次障がい者計画策定に向けた発達障がい児者総合支援事業の方向性について」ということで、事務局からご説明をよろしくお願いいたします。

○事務局

議題2「第6次障がい者計画策定に向けた発達障がい児者総合支援事業の方向性について」資料2に基づき説明。

○部会長

ありがとうございました。非常にたくさんの内容を含んでおりますが、第6次障がい者計画策定に向けた発達障がい児者総合支援事業の方向性についてという観点で、今、お話しをいただきました。

次期計画の策定に向けて、発達障がい児者の支援施策についても、現状の取組を振り返り、より施策を充実させるためのご意見を伺いたいというお話でございました。

説明のあった各事業のなかには、これまで当部会で方向性を議論し、見直しなどが行われているものもありますが、委員の皆さまには、改めまして、また、新しい方もいらっしゃいますので、忌憚のないご意見をお聞かせいただきたいと思います。

それでは、ご意見やご質問のある委員の方は挙手をお願いいたします。まず、フリーハンドで、いかがでしょうか。

非常にたくさんありましたので、前からもう一度見直すだけでも相当時間がかかるかと思うので、お考えいただいている間に、それぞれの観点から、少し絞り込んでご意見をいただきたいと思います。

まず、医療のお立場から、例えば、初診待機解消の話とか、5歳児健診の話とか、専門医師研修の観点、どれでも構いませんが、いかがでしょうか。

○委員

そうですね。いろいろ盛りだくさんなのですが、一つ、5歳児健診が、ちょうど今年度からこの市でも始めることになって、私も研修のほうに携わったのですが、保健師さんを対象とした研修でした。

ただ、健診での気づきとかの部分は、まずは大事だと思うのですが、その後の支援の仕方とか、家族支援の仕方であったり、ちょっと5歳児健診とずれますが、幼稚園の先生とか保育士さんへの研修というのは、1回だけで終わるものではなくて、ぜひ継続的に取り組んでいただけたらありがたいかなと、いいのではないかなと思いました。

○部会長

ありがとうございます。例えば、その市が5歳児健診を始めるにあたっては、悉皆でされるのか、全数をされるわけではない、抽出？

○委員 はい。

○部会長

抽出で、はい。ありがとうございます。

そうしたら、同じく医療のお立場から、今度はもう少し大きい人（年齢層）も含めて、いかがでしょうか。

○委員

ちょっとざっくりと大きすぎて、何を話したらいいかわからないですけれども。

やはり発達障がいを診られる先生たちを増やさないといけないというのは、私たち病院でも思っています、特に児童、子どもさんに関しては非常に時間がかかるので、先生方によっては、「子どもはちょっと避けたいな」と、「認知症のほうになりたいな」とか。認知症も時間がかかるのですけれど。

そういうので、同じ精神科なのに分けてしまっているのは、いったいいいのかどうかというのがあって、精神科医になった以上は、できるだけ子どもから老人まで、全員が診られるようにというふうな方針を病院としては出しているのですけれど。

やはり児童というのは、児童の専門の先生でないと診られないのではないかと考えているのですが、「いやいや。そんなことはない。精神科医だったら誰でも診たほうがいい」と、最近、ちょっと方針を変えていて、このハードルをどうやって下げていくかというのを、今、病院では考えているのですけれど。

そうしないと、特別の先生でないとそういうものが診られない。児童の問題ですから、発達障がいではないのですけれど。

ですから、どうしてもそういうところにハードルができるのかなと思って、最近、われわれのところでは、「君も子どもを診てね」と、病院から言っています。

○部会長

ありがとうございます。非常に重要な観点だと思います。今、専門医師研修のコーディネートをしてくださっていますが、今のお話も踏まえて、何かコメントをいただけますでしょうか。

○委員

今の先生のお言葉は大変ありがたいなと、診られるお医者さん、仲間が増えるとうれしいなと思っています。

このところ、続けて医師研修をさせていただいております。こちらの資料でも書いていただいておりますが、例年、多数の方から申込みをしていただいて、実際に研修を修了していただいているのですけれども。

じゃ、実際に自分のところの病院で、「さあ、診ようか」となったときのハードルが、実は意外と高い

ものがあるというお話はちょこちょこ聞きますので、今回、うちの圏域では、実際に発達障がいの専門医師養成研修を第1回目に受けていただいた先生に、自分のクリニックを開業して診るまでの流れというのをオンラインでしゃべっていただきました。そういう、できるだけ診るハードルを下げるという取組を進めたいなと思ってやっております。

そのなかで、毎年、ちょこちょこ話題が出るところが一つありまして、これは、第6次計画にもちょっと反映できるのかなとは思っております。

一つは、歯医者さんが研修を受けたいと。実際に診断をするわけではないけれども、そういう子が来たときにどう診たらいいだろうと。

で、同じことが、眼科医、耳鼻科医とかでもありまして、子どもの眼を診ている、耳を診ている先生も研修会に参加していただいているのですが、そういうふうな、診断もそうですが、例えば、そういう子が医療機関に来たときに、どのように診たらいいかみたいなのところの一つと。もう一つは、例えば、病院とかクリニックで診断した後に、どこにどうすればいいのかという、いわゆるつなぎですが、どうもいったん分断されるみたいな印象があるようですので、そういうふうなところなども検討できたらなと思っております。

研修会をしていて、だいたい毎年アンケートの感想で出てくるのが、そこら辺のところでしたので、参考までにです。

○部会長

ありがとうございます。後段の話は、毎年よく議論されて、見つけるだけではなくて、それをどうつないでいくのか、どこにつなぐのかというのは、この部会のなかでも何度も議論されてきて、いいものが見つかっているように見えるのですが、なかなか現場に具体的な形で降りていかないというところは、非常に課題だと思います。

今、最初におっしゃっていただいた、歯科医さん、眼科医さん、耳鼻科医さん、確かにただの内科のお医者さんの聴診器だけではなくて、かなり専門的な刺激を伴う診療なので、とても難しさを感じています。

歯学部は、障がい歯科ということで、別途、枠組みがありますので、そういった形で発達障がいもそのなかの一つとして、どんな取組をしたらいいのかというのは、ある程度取りまとめているんですが、そういうところが増えていくためには何が必要かというところは、また研修のなかで先生に検討していただけたらと思います。ありがとうございます。

そうしましたら、続きまして、支援者のお立場からということで、何かございますでしょうか。

○委員

すみません。就労の関係に割と特化しているので。医療の話の後となると、ちょっと難しいのですけれど。どうなのでしょう。実際に来られる方のなかには、「グレーゾーン」と言われる方々というのが、特に近年、ハローワークでは割合を多く占めておりまして、やはり就労が難しい方のほうがハローワークに来がちというか。

割と民間の就職支援の会社が、近年、台頭してきているので、ハローワークということになってくると、そういった傾向のお客さまが、年齢を問わずというところで、相談等も長引く傾向にあるというこ

ろはございます。

先ほどからつながりが切れるという話が聞かれるのですが、ハローワークでの就職支援とかの場面で、医療機関の方とのつながりというのは、僕の経験上、あまり見聞きしたことがないので、そういったところのつながりもあっていいのかなという感じで。

昨年度から、新卒応援ハローワークのほうで、コーナーのタイトルもいろいろと悩んだところで、「専門支援コーナー」というコーナーで、そういった傾向が強く見られるようなところで、就職がなかなか決まらない、見つからないというところになってくると、そういったコーナーを設けて支援とかもしたりしているのですが、キャリアセンターからのつながりというのも、なかなか苦慮しているようです。

始まったところですし、まだ1年経つか経たないかという話なので、そういった状況のなかで活動しているというところで、こんな感じでいいでしょうか。すみません。

○部会長

ちなみに、大学生からのつながりみたいなものは、何かされていますでしょうか。

要するに、大学を卒業して、いきなりハローワークに来るというのはないと思うのですが、就職が決まらず、そちらに行かれるケースはたくさんあるのでしょうか。

○委員

そうですね。実際、発達障がいのみならず、就職が決まらずそのまま卒業してしまう方も一定数いますので、そういう意味では、当然ダイレクトに来られる方もいらっしゃいますし、逆に、キャリアセンターからのつながりということになってくると、そういった情報なりもあればということで、そこは、今、外に出る職員もいますので、そういったところでキャリアセンターとのつながりを少しずつ作っていているという現状です。

○部会長

ありがとうございます。最近だったら、大きな大学は、必ずと言っていいほどユニットが大学のなかにありますので。

○委員

当然ね。

○部会長

そこのつながりが、まだ具体的に全部が共通したフォーマットで動いているというような感じではなくて、手探りでされているというところなのかなと。

○委員

まさに手探りで状態ですけれど。

○部会長

そういったところも、今後、大学側からのアプローチであるとか、そちらからの何かヒントみたいなものが、こういう場で出していただけるとありがたいかと思っていますので。

○委員

はい。また事例ができていけば。でも、なかなか苦労しているというのはよく聞きます。

○部会長

ありがとうございます。そうしましたら、委員、よろしくお願いいたします。

○委員

よろしくお願いいたします。私どもは、成人期の就職支援のところに特化して行っておりますので、どうしても成人期の方の方ということになるのですが、こうやって取組を見ていると、児童に関するものがウエイトが高いのかなというところが正直な気持ちです。

私どもに来られる発達障がいの方は多くいらっしゃるのですが、成人期になっていろいろ不適應な状態で診断を受けられてという方が多くいらっしゃいます。

そういった方が、職業生活をうまく送っていきえるように対処力をつけていくような場と言うのでしょうか。例えば、対人コミュニケーションとか、職場のなかで相談したりとか、ストレス対処とか、そういった診断を受けて力をつけていく場が多くないのかなと思うところです。

で、福祉支援のなかで就労移行とか福祉サービスもあるのですが、そういったところでしっかりと積み上げをしていけるといいなと思うのですけれども。

なかなか効果的に支援がまだできていない部分などもあったりしますので、そういったところに、成人期の方が診断を受けて、しっかりと対応力をつけられるような場や施策がよりできてくるといいかなと思ったりするところです。

「どうしてください」ということではないのですが、就労支援の現場のなかで感じているということでお話しさせていただきました。

○部会長

ありがとうございます。これは全体会議なので、小さい子から大人まで全部入ってしまして、今度、成人ワーキンググループ等々でも意見を反映させられたらなと思います。引き続きよろしくお願いいたします。

そうしましたら、ここで司法のお立場からということで、何かコメントはございますでしょうか。

○委員

すみません。まだ私自身が、細々と現場で経験していることと、皆さんたちが大きな視点で議論されていることがまったくかみ合っていないので、「さて、何を発言しようかな」と思っているのですが。

ただ、こういうことだけは言えまして、今、いくつかの事件があるなかで、前にもちょっとお話ししましたが、聴覚障がいがあったために、その後の適切な教育を受けることなく育ってしまって、規範意識が十分に育っていない、そういう人が、犯罪という形で我々の世界に飛び込んできた。

で、この後、どこに戻したらいいのかというのを、今、地域生活定着支援センターの方などを含めまし

て、いろいろと協議しているのですが。

私自身が、全然イメージがつかめないなということを悩んでおりまして、今、皆さんたちが議論しているこの大きな世界のなかに、どこか救いを求められるような手掛かりがないかなと思いながら聞いている次第なのですが。

今は、聴覚障がいに基づく話をしましたが、これも、小さい頃からおそらく何がしかの問題点があったのであろう今は統合失調症の人の事件もありまして、これも、警察官とも話をしながら、「刑事事件を終えた後、どこに戻すんだ」というのが、やはりこれもなかなかうまくいかないのです。措置入院には要件が高すぎる。じゃ、同意で任意入院ということになれば、誰がお金を払うのか、「そんなお金なんかないじゃないか」ということになってしまいますので、本当に、もう宙に浮いてしまっているという感じがするというのが正直なところです。

そんないくつかの例、話せば切りがない側面もあるのですが、そういう人たちが、ここでの議論とどんなふうな形でかみ合っていたらいいのかということについて、申し訳ないです、少し勉強をさせていただきながら、また少しピントの合った発言ができるようにしていきたいと思っております。すみません。そんなところでよろしくお願いいたします。

○部会長

いえ、とんでもございません。非常に課題感をはっきりしていると思います。おそらくいろいろなつながりという部分の枠組みであるとか、地域という枠組みであるとか、それから、私が、普段いろいろなところに参加している自助会のことであるとか、まず、公的なところのサポートを受ける施設とかサポートとか、もちろんそういうことも必要だと思うのですけれど。

まず、自分の居場所をどうやって確保するのかという部分について、この頃は社会的な資源が以前よりはずっとできてきていると思うので、そういった情報がきちんと本人に届くようにするというのが大きいのかなとは感じております。

そういったところは、また親の会とか当事者会というのが、今日は3名の方が来ていらっしゃるので、それをお聞きしてみたいなと思います。

そうしたら、その前に、大人の相談支援というところで、特に地域ともつながっていらっしゃる委員さんからコメントをいただけますでしょうか。

○委員 そうですね。発達障がいのある方が、身近な地域で自分らしく豊かに暮らしていくことを実現するためには、やはり地域の支援者の人材育成というところがすごく大事になってくるのではないかなと思っています。

で、座学での基礎研修とかは、アクトおおさかでもよくさせていただくのですが、それを学んで現場に汎化させるというところがやはり難しいのかなと思うので、実践の形式につながるような研修ができていけるといいのかなと思っているのですけれども。

それと、「発達障がい」という名前自体は、この20年間でとても広がってきたかと思うのですが、やはりその人の特性に合わせた個別の適切な支援を組み立てていくというところが、まだまだ地域では広がっていないのかなと思います。

なので、個別の支援を組み立てようとするとなると、その人の脳のタイプの特性とか、周りにある環境

要因というのが何なのかというのをアセスメントしていくということが大事になってくるかと思うのですが、そういうところは動画だけの研修だけでは難しいかなと思うので、そういった研修というのも大事になってくるかなと思います。

また、対象も、強度行動障がい研修というのは、国のほうでも、中核的人材から広域的人材まで人材育成のシステムというのが整ってきているかとは思いますが、グレーゾーンの方を含めた高機能障がいの方を、日頃支援している支援者の方に、もう少しフォーカスをより当てた研修というのにも必要になってくるのかなと思っています。

それでいうと、やはり相談支援とか、基幹相談支援とか、就労支援に携わっている方々への人材育成のための研修も、今後、充実させていく必要があるのかなと思います。

あと、アクトおおさかでは、先ほども説明に出ていた「発達障がい地域支援力向上事業」をさせていただいているのですが、そこでも、事業の枠組みが、「他領域との連携が必要です」としていただいているので、活用していただいている市町村の行政の方に、「福祉だけではなく、他領域とも連携しながら、地域の支援力向上を目指していくことが大事です」と言っていきやすい枠組みには、ありがたいことになっています。

結構、子どもの支援について課題を抱えている市町村が多いのですが、そのなかでも成人とか高機能障がいの方とか、グレーゾーンの方、よりわかりづらい層の方のニーズを把握できている市町村というのは、とても、とても少なく、まだそこに目を向けられていない市町村も多いので、福祉との連携というところが就労であったりとか、生活困窮とか介護とか、ここに書かれているような保健医療というところにまで連携というのはつながっていないという現状があります。

今後、令和9年以降も、向上事業の3年連続の形というのはとてもいいかなと思っていますので、令和9年以降も継続してできたらなと思っていますし、先ほど申し上げた成人の就労とか生活困窮とか、そういうところと福祉との連携をより進めていく必要があるかと思っています。

今は子育てとか教育とか福祉というところの取組の実績はできてきているので、それも進めつつ、まだ連携が足りていない領域との連携をしながら、支援体制をつくっていけたらなと思っています。

で、メンター事業に関してなのですが、これは、本当にありがたいことに、依頼がどんどん増えているのですけれども。

やはり今の人員体制で、メンターさんに安心して活動していただいて、丁寧にサポートができる件数というのは、もう本当に15件ぐらいで、今はその倍近くをスタッフが頑張っていて、本当に苦肉の策で、資料に書かれているように二人体制を、条件がある程度そろったところには、アクトおおさから、事前の打ち合わせとか当日の同行はせずに、メンターさんと依頼元の2者間でやっていただくというふうにはしているのですけれども。

それでも、メンターさんにとっては不安があるなかでの活動をさせてしまっているというところで、本当はアクトおおさが事務局として、しっかりとどんな依頼であってもフォローをさせていただけるのがいいのかなと思うのですが、なかなかそれが難しいという実態があるかと思います。

ただ、メンターの方の経験談というのは、とても有益な結果が出ていまして、私たちも、10年ぐらいのアンケート結果を統計で分析させていただいたのですけれども。

ご家族の知識の提供以上に、支援者と家族の両方に、気づきとか共有とか、共感とか、自分の支援を振り返るというようなことを生み出しているという結果がわかったので、本当に有益な事業だと思います。

ので、メンター事業というのを、より多くの市町村や保護者の方に届けるということをしていきたいなと思いますし、それができるような体制づくりというのを、今後も引き続き求められるのかなと思います。以上です。

○部会長

ありがとうございます。上から順番に気付いていらっしゃる場所をずっとお話しいただいて、特に最後のメンター事業については、60名超の登録があるけれども、派遣数としては、去年度は29件というところで、本当にこれを広く行き渡らせるためにはどうするかというところは、また引き続いてこの部会やワーキンググループのなかでも見ていかせてもらいたいなと思います。

これは、一番ハードルになっているのは、マッチングとか、メンターさん自身の不安であるとか。

○委員

そうですね。いろいろな要素があると思うのですが、やはり過去に大変だった経験を振り返って、整理して、不特定多数の方にお話をさせていただくこと自体が、すごくストレスがかかることをしていただいているかと思うのですけれども。

60名の登録の方がいて、それは、全国的に見ても大阪府はとて多いのです。ほかの都道府県だったら、一桁とか、十何人とかというところがあるので、大阪府の場合は、本当に親の会の方に協力していただいて成り立っているのですけれども。

60名に対して依頼は少ないので、もっと活動したいというご意見も伺っているのですが、それを、事務局として広めていきたいというのはあるのですけれども。

その件数をなかなかフォローしきれないという、今の人員体制では難しいという、もどかしい部分がありまして、広めて依頼件数を伸ばしていったら、メンターさんに安心してたくさん活動をしていただきたいのですが、それをするのには、なかなか体制が整っていないことが一番ネックになっている部分かと思います。

○部会長

ありがとうございます。私も、大阪自閉スペクトラム症協会の立場からもよく耳にするので、どうしたものかなというところは考えるところではございます。

そうしたら、大人の話が少し続きましたが、今度は、支援者の立場からということで、お願いいたします。

○委員

よろしくお願いします。子どもの時期の支援体制の充実ということで、今日の資料の9ページとかにあるみたいな、「地域発達支援事業所等サポート事業」というのが、今年度から再構築していただいております。うちは支援拠点として、豊能圏域と南河内圏域を統括しているのですが、まず、その役割をしっかりと果たせるようにしていけたらなと感じているところです。

特にコンサルテーションで、各事業所を訪問させていただく機会も持とうとはしているのですが、地域の事業所さんも、日々の支援でいっぱいいっぱいという感じで、困っているけれど、そこに手を挙げて

来てもらって、ゆっくり自分を振り返るといふところの物理的なハードルの高さであつたりとか、あと、放課後等デイサービスの利用も、1箇所ですつと過ごしているというよりも、何箇所かの事業所を掛け持ち、掛け持ちで利用されているので、どこか1箇所のサポートをすれば、その子の課題とか生きづらさが解決するわけではなくて、やはり点ではなくて面でみたいなのことのサポートの大切さみたいなのを感じているのですが。

そういったところのトータルのコーディネートというかサポートみたいなのが、新しく再構築されたなかで役割が果たせたらなと思ひながら、これから、またいろいろな人の力を借りてやっていけたらなと思ひているところです。

あとは、今、いろいろな部署の方、いろいろなジャンルの方からのお話を聞きながら、放課後等デイサービスとかも、日々のプログラムに乗るとか支援が安定するといふその先に、18歳以降のステージが変わっていく支援のなかでの移行みたいなのところに役割として果たせたらなと、話を聞きながら自分でハードルを上げてしまったのですが、感じたところです。すみません。以上になります。

○部会長

ありがとうございます。課題をしっかりと見ながら、新しい枠組みでどこまでいけるかなといふところと、実際の放課後等デイサービスが18歳までといふところから、就労の話に繋ぐ部分について、放課後等デイサービスにいる間から何を醸成していけばいいのかといふところも、共通した捉え方みたいなのが出てくるといいなと思ひますので、ぜひよろしくお願いいたします。

そうしましたら、今度は教育のお立場からといふことで、よろしくお願いします。

○委員

よろしくお願いします。二つの視点で少しお話しさせていただきたいと思ひますので。

令和4年4月に文部科学省から、「学びの場」といふことについての検討といふ要請があり、その結果、通級指導教室といふのが非常に増えたといふのが現状であります。

だから、今まで支援学級に在籍していた子が通級指導教室に移行する場合や、これから学ぶといふことに対して通級指導教室を活用していく、そういう意味では、この3年間で、大阪市や堺市のような大きなところは、別の巡回等で考えていると思ひますが、ほかの市は、ほぼ一つの学校に通級指導教室が一つできてきたといふ現状があると思ひます。多いところは通級指導教室が二つから三つができていふところも増えてきている。

といふことはどういふことかといふと、発達障がいの子もたちが、学びの場として通級指導教室を活用することが非常に増えてきていると、そういった場がきちんと学校にできてきているといふのが、非常に大きく充実したところかなと思ひます。

そこから考えると、やはり通級指導教室が極端に増えてきていますので、通級指導教室を担当する先生方の、発達障がいだけではないと思ひますが、発達障がいに関する研修といふのを充実していくことがやはり大きな課題ではあるかと思ひております。

また、そこから、学校または保護者から、私のところでも検査の依頼が相当来ていて、その理由を聞いてみたら、「医療機関や相談機関へ行くと、待ちが半年ある」といふことを言われます。「だから、すぐにやってくれると聞いたんで」といふのですが、なかなか簡単なことではなくて、土日にはできるだけのこと

はしているつもりなのですが、それでも、どんどん増えてきているなと思います。

特に「WAIS（ウェクスラー成人知能検査；ウェイス）という成人用になってくると、していただけるところが少ないということですから、WAISの依頼も結構あつたりします。

そういった意味では、早期にしっかりとアセスメントをしていくことの充実というのが、やはり大きな課題の一つかと思っております。

通級指導教室の先生方の研修の充実と、アセスメントの機会をうまくしていかないと、半年待ったら、また課題性も変わってしまうことがあると思うので、そういった意味では、そこをスピーディにできないかなと思っております。

二つ目は、発達障がいに関係の子どもたちのほとんどが高等学校に入学する。これも、私学・公立を問わずに入っていくわけですから、そういった意味では、高等学校の教育課程のなかで、発達障がいをどのように捉えて取り組んでいくのかということについて、やはりしっかりと再研修していくことが大事になってくるのではないかなと思っております。

高等学校が、そういった意味では、特別支援教育でいうと、最前線になってきて、今度、高等学校から大学のほうに来ていていると思います。大学のほうは、通信制から大学でリスタートしようというのが増えてきていると思いますし、大学のほうが相当の要請があつて、入学前の3月の段階で相談というのが非常に増えてきているという現状があります。

もちろんその後の就労というところで、インターンシップに対して合理的配慮ということも考えてほしいとの要請もいろいろあつて、「障がい学生支援室」ということをやっているのですが、非常に多くなつてきているなと思います。

そのときに、発達障がいとともに、様々な二次的な諸問題が重なってくることが、やはりこの時期になってくるとあると思うのです。それが、大きな、大きな課題になって、対応というところが難しいなと実感しております。

障がいと言つていいかわからないのですが、二次的な諸問題に対する早期の対応をしていくことが、就労とかにつながっていくのかなということもつくづく思うところであります。

大学も、いろいろなところでこういうことが話題になってきているというのが義務化になってきたと同時に、私学のほうも随分進めようとしていることは言えると思います。この2点のことを報告させていただきます。以上です。

○部会長

ありがとうございます。非常に明確に課題をおっしゃっていただきました。本当にスピーディなアセスメントというところは、特に小さい小学校や中学校あたりに。

で、今、WAISはもう少し大きくなってから、成人の検査というところなのですが、行われるところが少ないのと、それをどう利用するのかというところがまだ醸成されていなくて、単に「診断を付けてこい」みたいな乱暴なところもまだまだあつて、そのような間違つた使い方をされるぐらいだったら取らないで、一人一人を丁寧に見ていращやる今のやり方のほうがよほどましだなと思うことがよくあるので、そこら辺は、しっかりと仕組みづくりとともにやらないといけないかなと感じています。

それと、今、先生がおっしゃつた、大学の支援ユニットで、診断とか相談というところについて、発達障がいの観点でやっているところが随分増えてきたと思うのですが、やはり既に相談に来た時点で、メ

ンタルヘルスの問題や適応障がいの問題を抱えていらっしゃる子どもたちがたくさん来ます。

で、われわれのところのような大きな大学だと、その大きな枠組みはあるのですが、結局、そこに行くハードルが高くて、結局、各研究科、例えば、工学部だとめちゃくちゃデカいんですね。

ですので、工学部だけで支援窓口があって、むしろその先生などは、大学本体のアセスメントをきちんとし、つなぐべきところにつなぐというようなやり方ではなくて、本当に体を張って 24 時間体制で見ているんです。

で、結局、学生さんたちからすると、そのほうが役に立つというふうにおっしゃるので、こういったところをどうやってシステムにしていこうかというのはすごく課題だなと感じています。ありがとうございました。

そうしたら、親の立場からということをお願いいたします。

○委員

テーマが大きくて、ちょっと各論的な感じになってしまうのですが、主に成人期のほうに、今、息子も成人していますので、そちらに目が向きがちなのですけれども。

今おっしゃっていたところとか、あと、先ほどお話しされていたのと少し関連してくるのかなと思うのですけれども。

今、「切れ目ない支援」という言葉が、本当にいろいろなところで出てくると思うのですが、学齢期においては、かなり切れ目ない支援になってきているのではないかなとは思っています。

うちの息子、長男は 30 歳なのですが、ちょうど学齢期のあたりというのは、ま、それでも先生方の、個人個人の先生の努力で中学から高校につなげていただいたり、小学校から高校につなげていただいたりというのはあったのですけれども。

そういうのが、今、結構システムチックになって、きちんとそういうのがされて、大学においてもきちんと支援をせよというふうになってきていると思うので、そのところは。ま、それでも課題はあるのでしょうが、私などから拝見していると、「うらやましいな」というぐらいにはなっているのだと思うのですけれど。

今、30 歳を迎える息子がいるところで一番感じているのは、学齢期のところまでと、先ほど 18 歳のおっしゃっていた、そこで就労となったときに、正直、支援がブツンといったん途切れてしまう、そういう印象というか感覚は持っています。

特にここ最近、学齢期の支援が充実すればするほど、そこから以降の支援がぱたっと途絶えるぐらいの感覚なのです、当事者からすると。

だから、それまでが充実すればするほど、その感覚で親も子もいっていて、いざ就労となったときに、就職したときに、例えば、一般企業で障がい者枠で就労しても、やはり就労先の方が、現場の方は割とわかってくださっていても、人事の関連の方とかがご理解がなくて、現場から声を挙げていただいても、制度的に支援といいますか、合理的配慮がなかなかいただけないとか、理解していただいた対応にはならないということもあたりはするのですが、そのところが、やはりブツンと切れてしまう印象がすごくあるかなというのがあります。

で、すごく細かな話になってしまうのですが、就労移行支援事業というのがあろうと思うのですが、先ほど先生もおっしゃっていたような高機能障がいの方とか、いわゆる発達障がいのなかの、どのぐらいの

割合がそうなのかわからないのですが、就労移行支援事業でされている事業の内容がそぐわないのです。

だから、就労移行支援事業所さんも、今、特にすごく増えてきていろいろあるのですが、そこにきちんとはめ込んで、うまく対応できるといいますか、うまくいく者もいれば、そうではなくてあふれてくる者もいて、うちの息子なんかはあふれるほうなのです。

たくさんあるのですが、利用しても、何度かチャレンジはするのですが、「あ、やっぱり」と。

本当に構造的にカリキュラムが組まれていて、これをしなければ次のステージに上がれない。なので、研修にも行けないし、紹介もしていただきにくいとなる。

かといって、一方で、特例子会社さんとか、ハローワークさんとかでも、ある程度集中して面接会とかを企画してくださったりとかして、それに息子も行ったりしたことはあるのですけれども。今、そういう面接のところに行くと、ほとんどの方が就労移行支援事業所さんがついて来られているパターンが多いのです。

そうしたら、企業さんからすると、就労移行支援事業所さんがついて来られている人と、親がついて来ている者と、一人で来ている者と、やはり安牌を取られて就労移行支援事業所さんがついて来られている方となってしまっている、それは実態としてあるのかなとはちょっと思っているのです。

だから、そういったものがあるなかで、ライフステージのなかで、時間軸ではそういうのもあるのですが、その一方で、横軸というべきかどうかかわからないのですが、発達障がいそのものが、社会にある程度、それこそ幼少期の頃からうまく支援がいていて、一定の適応ができている人もいれば、そうではない方もいるなかで、適応されているがために、発達障がいそのものが普遍的であるにも関わらず、治っているという誤った認識といいますか、そういったものを持たれるような方が、正直言って、市区町村のお役所の方のなかでもいらっしゃるような気がしています。

で、これは、例としてなのですが、何かの支援を受けるときの計画相談という事業があると思うのですが、息子も言っていたのですが、「計画相談はあるけれども、継続相談がないよね」と。

で、見守りが必要な方が多くて、アセスメントの大切さというお話も先ほどからも出ているのですが、やはりどれだけ研修を受けていただいても、知識としてのものはおありでも、それを踏まえて当事者一人一人に対応されるのだと思うのですけれど。そのときに、やはりほんと来て相談をされて、その人の特徴とか、一人一人ですべて特徴が違われることが、どれだけ経験が豊富な方でも、わかるのかというと、絶対わからないわけなのです。

で、それはどうやったらわかるのかというと、やはり継続してその方をずっと見続けているから、定期的に面談とかをしてお話をしているからわかるのであって、家族だったり、もしかしたら、就職先の方のほうかむしろよくわかっておられる、支援機関の方よりわかっておられるというパターンもあったりすると思うのですけれど。

そういう相談窓口というのも、基幹支援センター、生活支援センターとかで、本当にいろいろあって、どんどん数も増えていっていると思うのですけれど。

で、役所の窓口に行っても、「相談窓口はこんなにたくさんあります。いつでも相談を受けるので、困ったことがあったら、いつでも来てください」とおっしゃってくださるのですが、それは、正直言って、健常者の方にはそれでいいのだと思うのです。「何か困ったことがあったら来てください。こんなに窓口がたくさんありますよ」と。

でも、発達障がいの当事者にとっては、それはどうなのかなと。「いつでもどうぞ」というのは、正直、

「窓口はないぞ」と言われているのと等しくて、「いつでも」というのは、「じゃ、いつ、どんなときに相談にいったらいいの?」と。

で、そこに行ったときに、「初対面の方が、僕のことをどれだけ理解してくださっているの?」と。

で、実際に困りごとはここなのだけれども、そもそも特性だったり背景だったり、いろいろなことからお話ししていると、せいぜい1時間ぐらいのなかで、本題に入る頃には、「もう時間がないよね」とか、結局、わかってもらえなくて、いろいろなところで同じようにパターン化した返答だけが返ってきて、ただただ疲れて帰ってくるだけで、それでは次の相談には行かないと思うのです。

だから、すみません、各論と総論がごちゃ混ぜであれなのですが、そういったところに、ライフステージというなかで、地域の生活支援センターの方とか、そういったところの方は、ご理解いただけていても、なかなか制度として継続して見守ってあげるとかというお話を伺うことはないなと。

そこが課題といいますか、「そういう制度があればいいんだけど」というのは、常々おっしゃってたりするので、今、各先生方のお話に関連するかしらないかちょっとわからないのですが、今、そういった形で述べさせていただいたのが、私の率直な感想というところなのですけれども。以上です。すみません。長くなりました。

○部会長

ありがとうございます。ちょっとお話が。

○委員

ありがとうございます。私も、今のお話をお伺いしていてちょっと思ったのですけれど。

私は、子どもだけではなく、昔から成人もずっと診ていて、子どものときから発達障がいの子を、子どもからずっと引き続き診て大人になっている人たちが何人もいるのですけれど。

やはりうまく学校での支援を受けて、就労支援も受けて、普通に一般で就職している人もいるし、障がい者雇用で就職している人もいるし、就労支援事業所に行っている方もいらっしゃるのですけれど。

結局、どこにも適応できなくて、どこもうまくいなくて、結局、30歳代、40歳代とかになって、引きこもりというか、どこにもつながれなくなって、ほぼ自宅に引きこもってしまっていて、どこともつながりがなくなっている。

せいぜいたまに病院に来るかどうか、それも、なかなか来られなくなってしまって、親が来ているぐらいな感じになってしまっている人たちがいて、すごく困っておられると思うのです。

ま、ご本人自身は、あまり困っているというふうにはおっしゃらないですが、少なくとも家族の方ですごく困っている方というのは一定数おられるだろうなと思うので、そういう人たちへの支援というのも、今後、家族の支援だったり、家族同士の情報交換ができる場というのが必要になるのかなと思いました。

○部会長

ありがとうございます。今のお話と、フォローで別の先生がおっしゃっていただいたこと、それから、最初の先生もおっしゃったことは、かなり共通するところがあるかと思います。

なかなか制度に乗りにくいというところと、やはり健常者ベースでものが考えられていて、実際に支援が必要な人たちが、例えば、相談に行くことそのものがハードルが高かったり。

私も、ついこの間も同じことを聞かれて、先ほど少し申し上げましたが、大学の支援ユニットがあったとしても、そこに行くことにハードルが高すぎて、結局、身近で相談に乗ってくれる人を探しますと。

そうでないと、なかなかその人のことはわからないし、伴走してもらえないわけではない、本当に難しいなと感じます。

そういうのをどうしていくかというのは、また各ワーキンググループのなかでも見ていきたいと思います。ありがとうございました。

すみません。お待たせしました。次お話をお願いします。

○委員

すみません。もう、ほとんど他の委員が言われたかなという感じで思って。

私自身もメンターになっていて、年1回程度は行かせてもらったりとかはしているのですけれども。

メンター活動をやっていて、私は慣れているので、「もうついてきていただかなくても」と何回も言っていたいてしてはいるのですが、結構、現場の要望というのをすごい熱心に言われてしまうとちょっと引くのです。

実際に何回も行っているけど、「えっ、そこまで求められますか」みたいなときに、やはり入っていただけると、その間を取り持っていたりということがあるので、何回行っているけど、そのあたりの現場サイドのお話と、実際のメンター自身の温度感というのが、やはりなかなか一緒にはならないというところで、アクトさんがクッションになっていただいているという部分はあるので。

やはり何回もされていない方の場合は、入っていただいたほうがいいだろうし、特に初めての市町村さんや事業所の関係とかは入っていただくと、とても安心だなというのは思います。

ただ、実際子どもが、うちは26歳なのですが、大きくなっていくと、大きくなっていっただけの課題があるというか、成長したら成長したときの課題というのが、当日にまたお話ができたりとかして、「あ、そんな課題もあるのね」というのを、現場の方も知っていただける。

私自身は、話しながら、「あ、それ、ほんとに課題やったわ」というような感じで思えたりするのもあるので、それ自体は、メンターとしてもすごく自分の成長も感じられるし、それが現場に還元できれば、すごく有意義だなと思っています。

で、うちは、たぶんメンターがすごく多いので、独自にメンターの相談活動をやっているのですが、先ほど言っていたように、本当にこぼれ落ちる人が来るのです。

このところ、成人期の人に来てびっくりしたのは、親もちょっとうんざりしているというか、お金があるお家は特になのですけれど。ワンルームのマンションを与えて、そこに発達を引きこもりでもないけれど、働けもしないという、働く意欲もどうなのだろうという人を一人で置いているという。これは、虐待なのか、ネグレクトなのか、何だろうかみたいな。

でも、ご飯は食べていると言うし、現実から目を背けたい親御さん。

ただ、実際お金はずっとは続かないので、そういった部分で助けというか、これからどうしたらいいのだろうというときに、「今までどうしてたの」と言ったら、先ほどのお話みたいに、やはり学齢期はきちんとつながっているのです。

で、聞いていると、どうも高校もきちんと行っているけれど、大学受験に失敗したか何かで、そのあたりから社会からだんだん見えないところに入ってしまったという感じで。

でも、その人自身も、べつにそこまで力がないわけではないけれども、やはりしんどいと思っている親御さんは、子どもさんの力を見いだすこともできなくなってしまうみたいな、そういうところの救いの場に、今、うちのメンター活動はなっているのかなと。

インターネットに普通に出して、何か月かに1回相談事業というのをやっているの、やはりびっくりするような方が毎度来る。特に、最近は大阪府以外の相談の方もいらっちゃって、「えっ、その都道府県で何でつながれなかったんやろう」と思いながら、私たちは違う会ともつながっているの、その会を紹介したりとかして、やはりそこはその現場の方のほうが、親の会も知っているだろうしというようなつながりを、今、している最中です。そんな感じです。

○部会長

ありがとうございます。そうしたら、最後、すみません、お待たせしました。今度は大人の自助会、セルフヘルプグループの立場からということでお願いいたします。

○委員

そうですね。大きなところで言いますと、今、神経発達症という枠で考えたときに、ADHDの診断が出るか、ASDの診断が出るかという枠よりも、もっと広い、例えば、知的のボーダーの方とか、それ以外の社会生活の難しさを持つ方々というの、もうこの枠でやらないといけないような流れになっているのではないかという気もしております。

というのは、難病とか長期の引きこもりの方とかというの、おそらく何か福祉の枠でサポートをしようと思うと、おそらく精神疾患・発達障がいのところやるのかなというのがありまして、そこで、やはり社会モデルの考え方というのが入っての社会生活困難というところで。

で、私たちの会というのは、そもそも診断は問わない。コミュニケーションとか、でこぼこがあるということで、なかなかうまくいかない方が集まる当事者の会ということで、最初から広い範囲をもともとやっていたわけなのですけれども。

最近になって、やはり世の中の的にもそういう感じになってきたのかなというのがありまして、そうすると、「ADHDじゃないよ」とか、「発達障がいじゃないよ」と言われて、支援が受けられない方というのがいるということは、当事者としては、「そんなに困っているのに何で」となりますし、その辺で、支援者がいる人といない人の生活状況の大きな違いとか、親御さんでも、私たちから見ても、親の会に行ける人というのは余裕のある方なのです。

で、やはり当事者で子どもがいるけれど、自分もぼろぼろ、子どももぼろぼろで、子どもはヤングケアラーみたいになっていて、自分は仕事もできないし、依存症みたいになっている人たちというのもあるわけで、そういう人の存在というのは、おそらくちょっと見過ごされている可能性があるなとは思いますが。

ただ、当事者会には来られますので、そういうときに。

でも、やはり定着してどこかに行くということが難しく、どちらかというと、児相さんとか、そういったところが、そういう感じの親御さんとの関わりがあるのではないかなと思うのですが。

そういう見えない部分の大人のしんどさということも含めて、もちろんグレーゾーンも含めて対象として、体制を整えていくのかというのは、一つのテーマかなと思っています。

で、もう一つは合理的配慮です。教育の分野から就労というところで、どうしても切れてしまうというのは、本当に大きなテーマだと思うのですけれども。

そもそも合理的配慮というのは、教育分野での合理的配慮というのと、就労、お仕事になったときの合理的配慮というのは全然違います。

だから、「今までこういうふうに支援してきました」というのが、お仕事では一切通用しないわけです、だってお給料をもらわないといけないので。

で、そのところでの切り替え、そこをサポートできる支援者がいるのでしょうかというところ。そのところを両方わかって、そこをつなげられる人材とか、そこを調整できる人たち、そういう人をしっかり育てていく必要があるのではないかなと思います。

で、当事者グループでは、「こうしたらいいよ」とみんな言ってくれますが、直接サポートはしません。自己責任でやってもらわないといけないので、そういうときに行くところがないというのは現実的にあるなと思っています。

だから、子どもの場合は親御さんが主体で動いていいと思うのですが、大人になったら本人が主体で動かないといけないので、そうすると、就労支援でもよく来るのが、「子どもの頃からこういうふうにサポートを受けて大学も卒業しました。だから、手帳は取りたくないのですけれど、理解してもらって仕事を普通に一般にしていきたいです」みたいな方もいらっしゃるって、「すごくわかるけれど、難しいよね」ということにはなりますので、その辺、本人が社会のなかでどういうふうに自分が配慮を受けて、受けられるのか、そもそも配慮がどこからどこまでが配慮なのか、それは過剰なのか過小なのか、そういうことをわかっていく過程というのは、そんなに簡単ではありませんし、そこをどうやっていくのかというのが一つのテーマになるかなと思っています。

○部会長

ありがとうございます。制度のお話と、こうやって体制整備を考えていくということと、現場の実際の困り感との乖離という部分については、今の皆さんからの話を伺うなかで相当出てきたかと思います。そこをどう埋めていくのかというのが、こういう会議で大事になってくるのかなと思います。

で、合理的配慮につきましても、この訳が問題になっていまして、“reasonable accommodation”（リーゾナブル・アコモデーション）なので、あくまでアコモデーションであって配慮ではないのだという話がたくさんありますし、大人になれば、言語化できる能力がついた人は、やはり自分の困っていることをうまく伝えられる、その手伝いはどんどんとやっていく、そこが一番の支援になるのだというのは、信州大学の先生などがしきりにおっしゃっていらして、私もそこは非常に共感するところなので、考えていかないとけないなと思います。今の話からもよくわかりました。ありがとうございます。

そうしたら、だいぶ時間が押してまして、私のコントロールが下手で、すみません。

それでは、次の議題にいかせていただきます。議題3「市町村における発達障がい児者支援の取組状況について」ということで、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局

議題3「市町村における発達障がい児者支援の取組状況について」資料3に基づき説明。

○部会長

ありがとうございます。今日の検討項目の二つ目、市町村における発達障がい児者支援の取組状況の説明をいただきまして、それに伴い、今後、市町村において充実させていくべきこと、あるいは今のなかにも出てきましたが、さらに深掘りして実態調査をすべきこと、こういった点を、資料や説明を聞かれて、各委員のほうから、どうしたらいいかというあたりの意見をいただければと思います。

それでは、まず、自由にご発言いただけますでしょうか。いかがでしょうか。どうぞ。

○委員

教育分野における支援の充実ということで、先ほど言うかちょっと迷ったところもあったのですが、今回の支援の充実というところで、実際にちょっと増えてきていることで二つだけ、問題提起になるかと思います。

一つは、令和4年9月に、文部科学省からまとめ会議という形で出て、いわゆる特定分野に才能のある子どもたちということで、とりわけ知能の高いIQ140とかという子、「ギフテッド」と言われる子が、巡回相談でも上がってきていますし、私の大学のほうにも来ています。

それで、やはり発達障がいの特性と、得意な分野で才能がある、この両面への支援という意味での、「2E（ツイー）教育」というのが、いろいろなところで話題になってきて、その子を含めた授業改善・授業づくりをどうしていくのかということも出てきております。

こうしたより知能の高い、「知能の高い＝学力が高い」というわけではないと思うのですが、そういう子の多くは、今、不登校になっていることが多いなと実感しております。

「発達障がい」をキーワードにしたときの知能が非常に高い子、ここにも、発達障がいとしての支援の両面の支援が必要という意味では、ここが課題になるかなと。

もう一つは、日本語の指導が必要な生徒たち、小中もそうですが、高等学校は入試の枠があります。何十人という枠で日本語の指導が必要な生徒が入ってきて、日本語がわからないからなのか、発達特性を持っているのかというところで、発達の課題を持っている子というのが結構いるなと思います。そのアセスメントが結構課題になっているなと思って、実際に通訳を入れてさせてもらったりしているのですが、やはりそのところは早めにわからないと、わかるまでに卒業前になってしまうということでは、日本語の指導が必要な生徒たちが非常に多くなっているということでの発達の課題というのは、深掘りしていく必要があるのかなとは思っております。以上です。

○部会長

ありがとうございます。先生、それは、単純に外国語籍の方ということですか。

○委員

はい。

○部会長

ありがとうございます。最初のギフテッドの件も、我々のところでも取組の課題の一つになっておりますが。

今、障がいがあるということではなく、本当に才能がある子どもたちに、早いうちから大学生活になじんでもらおうという仕組みを私たちのところにつくっていて、高校2年生のときに、プログラムがあって、いろいろな研究室に夏休みの間に配属になって、実際に研究をさせてみて、その後に大学に来てもらったら、1年生のときからやっていくというプログラムがあります。

で、これに応募して来られるところは、たいてい進学校と言われるところからの子が圧倒的で、お話をよく聞いてみると、うちの理事たちは、「浮きこぼれ」と呼んでいます。要するに、学校のなかで非常に浮いてしまって居場所がないのだけれど、そこに来ると嬉々としてやっているという。

今の先生のお話と非常に符合するかなと思いました。またこういったこともやっていかなければいけないと。これは、市町村ということと、大学や高校というところでも考えられることかなと思いました。

ちょっと話を市町村に戻したいと思いますが、ほかにいかがでしょうか。どうぞ。

○委員

最近よく相談を受ける内容で2点、ここも調査ができたかなと思うのですけれども。

幼稚園の年代ぐらいまでは、療育で何とか頑張っていたと。

で、小学校へ行って、友人関係でのトラブルでどうしようと。相談も相談なのですが、練習をする場、「ソーシャルスキルトレーニングが」とよく言いますが、それをやっているところがなかなかと。放課後等デイサービス事業所もやっているところがなかなかというところで。

この調査だったら未就学児の療育というのは調査をしています、就学以降の療育にあたる、当事者が何かを身に付ける場というのを、できれば調査にあってほしいというのが1点です。

もう一つ相談が多いのが、発達障がい当事者が女性の方で、結婚して妊娠して出産する、この一連の流れでどう支援をするかという話題の相談が、今、すごく増えてきています。

同じことを繰り返しやることは、意外と練習でどうにかなるけれども。少子化で子どもが一人でとなったときに、子どもが一定育つまでずっとパニックになっているみたいな状況で。

実は、妊娠された当事者への支援もそうなのですが、そういう人に対する医療職への支援も相談がよくあります。いわゆる発達障がいの人の特性があると事前に聞いていたけれども、そもそも成人で、パニックになって、訳がわからない状況になっているのに、「じゃ、どうすればいいか」と。先ほどの歯医者さんへの研修もそうでしたが、そういうふうなところも。

だから、要は、その妊婦さんが働いていなかったら、社会所属、集団所属がないのです。労働されている方は労働のところが、大学だったら大学があるのですけれど。

実は、この支援の枠組みのなかに、家庭で過ごされている、ニートでもないし、引きこもりでもないけれども、家庭生活が中心となっている成人の人への支援の枠組みというのが、検討する内容としてもあってもいいかなと思いました。以上です。

○部会長

ありがとうございます。深掘りすべきというか、新たな課題として考えていただかないといけないポイントの一つかと思います。

時間がだいぶなくなってきたので。はい。お願いいたします。

○委員

先ほどの委員の話とも少し重なるのですが、アクトおおさかでは、成人期で診断がついた方と一緒に、ご自身の強みだったり苦手な部分という障がい特性の整理、自己理解というのを一緒にさせていただくことが多くて、それをもとに、どういう工夫をしていったらいいのか、どういう配慮をしてもらいたいのか、どういう環境調整が必要なのかというのを一緒に整理していくのですが、こういう自己理解というのは、本当に大切になるかと思っています。

で、成人期になってやるというのはとても難しく、児童期とか、もう少し若いときに診断がついている方は、やはり自己理解と一緒に伴走してくれる支援者の存在というのがとても大切になるのではないかなと思うのですが。

社会に出る移行期の中高生の段階で、それをする時期というのが大事になるのではないかなと思うのですが、資料の5ページにある個別の療育のボリュームゾーンというのが、未就学から小学校3年生までというところで、中高生の支援というのは本当に足りていないのではないかなと思うので、このあたりの調査も、市町村さんに認識していただくためにもしていただけるといいのかなと思いました。

あと、ペアレント・メンターの養成というところで、17ページにある、「メンターは18市町村において実施」という結果が出ていますが、たぶん回答をいただいた担当課さんが把握していないのかなと思うのですが、実際は28市町村で活用いただいている実績がありますので、このあたりも、調査と実態が違うのかなというところで、実際は28市町村に活用いただいているところをご報告させていただければと思います。以上です。

○部会長

ありがとうございます。私の時間配分が下手で、もっと皆さんからご意見をいただくべきなのでしょうが、すみません。

ただし、先ほど一つ目の議題のときに、今の二つ目の市町村での取組、それから、深掘りすべきことも随分含まれていたかと思しますので、ここまでで、本日の議論は終了とさせていただきたいと思います。お話ができなかった方々、本当に申し訳ございません。

それでは、本日の議題については、十分にご意見をいただきましたので、これらを事務局に持ち帰っていただいて、次の各ワーキンググループに振り分けて、さらに検討を進めていきたいと思います。

皆さま方には、次は年度末にお集まりいただいて、各ワーキンググループで諮られたことを、再び議論していただいて、それをさらに第6次障がい者計画に反映させていただくというところに進めてまいりたいと思います。

それでは、マイクを事務局のほうにお返ししたいと思います。お願いいたします。

○事務局

本日、委員の皆さまには貴重なご意見を賜り、誠にありがとうございました。

これをもちまして、「令和7年度第1回大阪府障がい者自立支援協議会 発達障がい児者支援体制整備検討部会」を閉会いたします。

今後、こどもワーキンググループ、成人ワーキンググループを挟みまして、次回の部会は令和8年2月25日に予定しております。

各ワーキンググループの資料等についても、メールにて共有させていただきますので、引き続きよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

○部会長

すみません。最後にちょっとだけ。

各提供してくださった、「おたふく会」さんの会報、自閉スペクトラム症協会さんの JDD ネットの資料、DDAC さんからの会報、何かプラスアルファで情報を伝えることはあるのでしょうか。

先ほど委員さんからあった、府が取られたデータと、実際のメンターの数が違うという。同じように、毎年、JDD ネットさんが、これを手伝ってくださっている皆さんには本当に頭が下がる思いなのですが、府とは別に 43 市町村から、こちらにお配りした質問紙でデータを取っています。

なので、重なっている部分もあるのですが、取り方が違うと、こんなに数字が変わってくるのかとか、あるいは答えられた市町村の窓口の方が違うと、こんなに数字が変わってくるのかというのも参考になりますので、またご覧ください。

それから、府の資料とは違って、JDD ネットさんの資料は、自由記載のところにもものすごくたくさんの自由記載があって、ここには、今日、皆さんからいただいたようなお話がたくさん出てまいります。

なので、現場の方のリアルな困り感や必要性とか、ここに書いていることをぜひ参考にいただければと思います。

お二人とも、大丈夫でしょうか。はい。

すみません。では、これで終了します。ご協力、どうもありがとうございました。